

館長の交代にあたって

大阪商業大学商業史博物館は、一九九九年に大阪府で四番目の博物館担当施設として設立された。本学が開学七〇周年を迎える来年度において、当博物館も設立二〇周年をむかえることになる。このような節目の年を前に館長に任せられたことを大変光栄に思う。

この間、瀧澤秀樹館長（二〇〇〇年四月～二〇〇三年三月）は本学比較地域研究所所長を兼務され、研究所と博物館の緊密な連携をめざしつつ、「活動し、研究する博物館」を展望し、その第一歩として商業史博物館紀要を発刊された。中野安館長（二〇〇三年四月～二〇〇八年三月）も博物館の研究活動、とくに博物館スタッフによる江戸期大坂にかんする歴史研究に期待を寄せられた。伊木稔館長（二〇〇八年四月～二〇一八年三月）は、博物館がその価値を高めるために必要なものとして、設立の志にもとづくテーマ設定、そのテーマに沿った収集活動、そして収集物の効果的な発信の重要性を指摘された。その上で、当博物館の中心テーマが「近世大坂の商業」であり、博物館における研究活動、特別展、刊行物・インターネットによる情報発信、各種のセミナーや講演会のほか、地元の文化団体や小学校との交流をつうじた「親しまれる博物館づくり」、「地域社会への貢献」といった現在も当博物館の柱である諸事業の重要性を再確認されている。

これらを継承、発展させていくことが必要であることはいうまでもない。今後、さらに学内の様々なスペースを活用しつつ、大阪商業大学ならではのカリキュラムとの連携や、より若年層の来館者（本学の学生、地域の高校生、中学生、小学生など）にむけて、自発的な学びの機会の提供などが実現できれば、当博物館の価値は一層高まるように思われる。

そのためには、「近世大坂の商業」という従来からのテーマを最大限尊重しながら、大坂商人の社会や文化といった分野も取り込み、より明快で面白い筋書きをもった、分かりやすく楽しいハンズオン展示などが必要であるように思われる。

幸いにも、現在、博物館では各々の職務に熟達された方々が力を尽くされている。私も博物館が本学の顔、シンボルの一つとしてよりいっそう魅力が発揮できるよう、微力ながら貢献したいと考えている。皆さまからの、ご助言、ご叱正、ご支援など、心からお願いする次第である。

